

72 大阪大学微生物病研究所創設之地

北区堂島3(NTTデータ堂島ビル)

- ▶ 大阪や神戸がコレラ・ペストなどの外来伝染病の入りやすい場所であり、また関東大震災の教訓から、大阪に微生物病に関する総合研究機関を設立する必要性が説かれました。
大阪財界の協力を得て、山口玄洞氏による多額の寄付を基に、昭和9年(1934)、この地に研究所本館が建設されました。



73 越後長岡藩蔵屋敷跡

福島区福島1-1-60(大阪中之島合同庁舎の北側部分)

- ▶ 元和2年(1616)、長岡藩に堀丹後守直寄が8万石で入封しましたが、元和4年、本庄へ移封となり、牧野忠成が入封し、幕末まで牧野氏が藩主として治めることとなります。当初は6万4000石でしたが、新田の開発などで天保期には13万石を越えました。良港である新潟港を領有し、毎年1万両の運上金を徴収することも出来ました。第3代藩主 牧野忠辰(タトキ)は、「諸氏法制」「町中掟」「郷中掟」を定め、江戸において荷田春満(カタノアスマロ)を師事し、古典祭礼を学び、第5代将軍 徳川綱吉に「易経」「論語」の講義を行いました。この第3代藩主 牧野忠辰に関する逸話が残っています。自らが考案して作成した木製の酒盃「十分盃」があり、これは、酒を八文目以上注げば、外へ全部流れ落ちる仕掛けになっていて「満つれば欠ける」という教訓を示したものとされています。牧野忠辰は名君として、第9代藩主 牧野忠精(タキヨ)により悠久山蒼柴神社に祀られました。その第9代藩主 牧野忠精は、幕府の政治舞台でも活躍し、寺社奉行、大坂城代、京都所司代を歴任し、その功績から享和元年(1801)老中にまで昇進しました。その後を継いだ、第10代藩主 牧野忠雅、第11代藩主 牧野忠恭も、欧米諸国が日本近海に現れ、多難になってきた幕政に参列し、国事に尽くしました。



第13代藩主 牧野忠毅



第9代藩主が祀られている悠久山蒼柴神社

天保14年(1834)6月11日、首席老中の水野忠邦は幕府の財政窮乏の穴埋めに、新潟港に着眼し、密偵河村清兵衛を現地に向かわせ、「薩摩藩が新潟港を利用して密貿易を行っている」ことを探察しました。長岡藩に対し「領内不取締」と有無を言わず強引に、運上金年額1万数千両を徴収しました。

ペリー来航後、尊皇攘夷か開国か、または公武合体か倒幕かなどの動きが出てきたときに、安政4年(1857)外様吟味役に就任した河井継之助は、安政5年(1858)から万延元年(1860)備中松山藩の藩政改革の立役者である山田方谷を訪ねました。改革について学び、長崎を見聞して帰藩後、郡奉行に任じられ「郡政改法」を手始めに藩政改革を推進しました。

改革が成功し、慶応3年(1867)には12万両の徴収ができ、そのうちの7万両を武器の購入に投じています。藩兵も近代装備を可能にさせ、慶応3年(1867)11月、家老に就任しました。2ヵ月後、鳥羽伏見の戦いの際、長岡藩は大坂の玉江橋の守衛にあたりましたが、徳川慶喜が密かに江戸へ帰った報告を聞くと、同藩も直ちに江戸へ帰ります。河井継之助は、江戸で藩の什器や財宝をすべて売却し、当時3門しかなかった「ガトリング砲」(1門5千両)を2門、買い付けます。そのほか多量の銃器、弾薬も購入しました。慶応4年(1868)3月3日、品川を発し長岡へ帰藩しました。長岡に戻ってから、あくまでも「武装中立」を目指しますが、新政府軍との対談(慈眼寺で行われた小千谷談判)で河井継之助と新政府軍監岩村精一郎ほか3名と交渉を行いましたが、決裂に至り、ついに「北越戦争」が始まります。維新史上最も壮絶な戦い「北越戦争」で、長岡藩は降伏。藩主牧野父子は謹慎。河井継之助は足に受けた銃痕が命取りになり、会津に向かう途中で亡くなります。新政府側でも長州の時山直八や、西郷隆盛の次弟の西郷吉二郎が亡くなっています。さて、長岡藩の蔵屋敷は、福島区にある大阪中之島合同庁舎の北側部分にありました。河井継之助は、安政6年(1859)7月5日に大坂蔵屋敷を訪れ、ここで宿泊しています。



河井継之助



長岡藩蔵屋敷跡



74 大石内蔵助良雄寓居跡

福島区福島1-4付近

▶ 暁鐘成著の「攝津名所図會大成 其之二」に忠臣蔵で有名な「大石良雄寓居跡」を次のように紹介しています。

浄祐寺の西梯起寺裏にあり、傳云(つたへていふ) 此所原天野屋利兵衛所持のざしきなりし故に良雄赤穂退居の後すべらく志ばらく此に寓せしといふ
今尚四方佛の手水鉢あり是の時よりの器なりとぞ
一説に此邊をいにしへより鵲の森といふよし名義詳ならず

「梯起(ていちょう)寺」は、明治期には既にもありませんでしたので、現在もある「浄祐寺」を手がかりに、また、長岡藩蔵屋敷の真北に「梯起寺」にあったことなどを考慮し、推定した地をご案内いたします。



大石内蔵助良雄寓居跡推定地



大石内蔵助良雄寓居跡推定地



大石内蔵助良雄像
(大阪市天王寺区吉祥寺)

75
76

赤穂義士ゆかりの地

矢頭長助・右衛門七墓所
矢頭右衛門七顕彰碑

北区堂島3-3-5(浄祐寺)

▶ 矢頭長助

赤穂藩に25石5人扶持中小姓勘定方として仕えていました。元禄14年(1701)、浅野内匠頭長矩の刃傷事件後、開城手続の際、家老大石内蔵助良雄の補佐役として活躍しました。仇討ちには当初から参加する意向でしたが病で倒れ、元禄15年(1702)7月28日に行われた「円山会議」には、子の右衛門七を代理で出席させました。同年8月、大坂にて亡くなります。臨終の際、右衛門七に自分の腹巻を与え、父の分まで働いて、亡君の仇を討ってほしいと遺言したといひます。

矢頭右衛門七

17歳のとき、父の遺志を継ぎ、仇討ちの同志に加わります。吉良邸討入りでは表門を担当しています。引き上げ後の泉岳寺では美男紅顔であったため僧侶たちに人気があったそうです。討入り後、水野監物忠之に御預けとなり、元禄16年(1703)2月3日に切腹しました。享年18。矢頭右衛門七の顕彰碑が浄祐寺境内にあります。「矢頭兼義碑 明治元年十一月建 河野逸撰文 小寺静書」と記載されています。この顕彰碑は東福寺別院(北梅田町)にありましたが、大火によりこちらに移されました。



矢頭長助・右衛門七墓所



矢頭右衛門七顕彰碑

97 「五大力の碑」

北区堂島3-3-5(浄祐寺)

▶

薩摩藩士 早田八右衛門は、北新地の「桜風呂」の菊野に一目惚れをしたものの、体よくあしらわれている事を知って激昂します。元文2年(1737)7月3日、菊野の居る「大和屋」へ乱入しました。菊野の横に女将も寝ていましたが、情夫と勘違いし、二人を滅多突きにして殺害しました。騒ぎを聞いて駆けつけた主人と下女3名にも斬り殺し、計5名を殺害する事件が起こりました。早田八右衛門は翌年の2月に千日前刑場で刑死。当初は「五人斬りの碑」がいましたが、明治42年(1909)の大火で消失したため、大正14年(1925)、「五人斬り」から「五大力」と改められた碑が建てられました。



大阪史跡探訪イベントVOI.9の見どころ

大阪史跡探訪Vol.9(4月12日)

①「大阪会議」の全貌

「大阪会議」は、坂本龍馬、中岡慎太郎、土方楠左衛門などが仲介として奔走し、犬猿の関係であった薩摩藩と長州藩を同盟締結にまで結びつけた「薩長同盟」締結と流れがよく似ているところが面白いと思いました。

その中でも木戸孝允が「薩長同盟」で見せた、相手(薩摩藩)への不信感、慎重さが、大阪会議でも(大久保に対し)見られる点。

また、大久保・木戸・板垣が、容易に大阪に集まって会議をしたわけではなく、龍馬のような仲介者が奔走して、何度も何度も当事者や仲介者が対談し、成立にこぎつけた会議であるということです。発起人は伊藤博文。仲介者は伊藤博文と井上馨。兩人とも思惑はまったく違いましたが、最終的に、復職を断っていた木戸自身が仲介役になり、大久保と板垣を結びつけ、木戸と板垣は復職することで会議終了。なのに、木戸は、薩長同盟時、龍馬に裏書を書かせたように、大久保や井上や伊藤を訪ね歩いて念押しを行っています。

これまで「花外楼」が脚光を浴びていましたが、最終の会議に至るまでに行われた会談の地「専崎楼」や「三橋楼」(碑はありません)跡地を訪ねます。

②天満八軒家船着場 新選組定宿「京屋」跡(新説) 坂本龍馬ゆかりの「堺屋」跡

新人物往来社「新選組大事典」に京屋跡は〇〇付近であると紹介されていますが、誤りであることがわかりました。「天満八軒家船着場」の碑が前に立っている「永田屋昆布本店」の永田社長から史実をお聞きし、また、大阪歴史博物館の学芸員のご助力もあり、上記2つの船宿の跡地を確定することができました。堺屋は伏見の寺田屋と提携を結んでいました。

寺田屋から三十石船に乗って大坂に向かう時、座布団や毛布などを寺田屋から借りた場合、大坂の堺屋で返せばよいといったような業務提携をしており、各船宿も伏見のほかの船宿と提携をしていました。

堺屋跡地特定のための実測の際、来阪していた皆川さんに偶然現地でお会いし、手伝っていただきました。

③坂本龍馬ゆかりの船宿「河内屋与次兵衛」跡

上記②と同様、「河内屋与次兵衛」の伏見の提携先は、伏見京橋町にある船宿「日野屋孫兵衛」です。乙女姉さん、おやべさん宛の龍馬の手紙(慶応元年9月9日付)に、伏見の寺田屋伊助と日野屋孫兵衛を利用していることが書かれています。

「日野屋孫兵衛」の提携先が「河内屋与次兵衛」です。「河内屋与次兵衛」から専稱寺(勝海舟寓居跡・大坂海軍塾)まで非常に近いので、利用した可能性が高いと思われます。その跡地をご紹介します。

④勝海舟寓居(専稱寺)跡、大坂海軍塾跡 勝海舟と西郷吉之助会見の地跡(元治元年9月11日)

この地は、これまで2回ご案内していますことをご了承ください。専稱寺跡は、場所の確定に苦労したうちの一つです。石碑はありません。しかし、坂本龍馬が確実に滞在および勉強をしたゆかりの場所です。また、元治元年(1864)9月11日、勝と西郷が会見したのもこの場所で、会見内容も非常に有名なものは、すでにご承知のことと思います。

⑤河井継之助宿泊の地「竹式楼」跡

今橋築地にあった料亭旅館で、浮世絵師 初代 長谷川貞信が描いた絵が残っていて、所在地確定につながりました。

⑥松蔭同士の対談跡

当時は吉田寅次郎といい、松蔭とは名乗っていなかったかもしれませんが、長州から江戸へ旅行が許され、大坂には嘉永6年(1853)2月10日、船にて常安橋下に到着。船中で一泊し、11日に砲術家 坂本鉉之助を訪問し、大坂城を一周して見学した後、儒者 後藤松蔭を訪ねています。また数日後にも数回訪ねています。

⑦大村益次郎寓居(漏月庵)跡

この場所も以前ご案内しました。ご了承ください。大村(当時は村田良庵)は、土佐堀にある倉敷屋を寓居先にして適塾に通っていましたが、倉敷屋に短期間いただけですぐに、漏月庵に転居し、初めて一軒家を持つこととなります。石碑は戦前ありましたが大空襲のため、倒壊したのが現存しません。

⑧忠臣蔵長屋跡

明治に入り庶民が姓名を名乗ることになったとき、46戸あった長屋では、途方にくれたあげく「仮名手本忠臣蔵」に登場する義士の名前をつけることになり、くじ引きで決めたそうです。転出転入がある中で、歌舞伎で吉良上野介に該当する高(こう)さんがこの長屋に転入しようとしたとき、長屋の住民が猛反対したといわれます。その跡地(推定地)を紹介します。

以上、ほかにも沢山ありますが、紙面の関係であとはお楽しみに。

次回のイベントも「大阪検定連携事業」(大阪商工会議所主催)として認定を受け、同所のメールマガジンやサイトでPRしていただいています。それをご覧になった方から参加申し込みもありました。

<http://www.osaka-kentei.com/shinchaku/shousai.php?id=20>